夢の時間

金井美恵子

新潮文庫

夢の時間

定価はカバーに表示してあります。

新潮文庫 草165B

昭和五十年一月三十日 発行
昭和五十一年三月十日 二刷

著者 金井美恵子

発行者 佐藤亮一

発行所 株式会社 新潮社
郵便番号 一六二
東京都新宿区矢来町七一
電話 業務部(〇三)(二六六)五一一一
編集部(〇三)(二六六)五四二一
振替 東京四一八〇八番

乱丁・落丁本は、ご面倒ですが小社通信係宛ご送付ください。送料小社負担にてお取替えいたします。

㊫ 印刷・塚田印刷株式会社 製本・憲専堂製本株式会社
© Mieko Kanai 1975 Printed in Japan

新潮文庫

夢の時間

金井美恵子著

新潮社版

2233

目次

夢の時間……七
奇妙な花嫁……九一
燃える指……一六一
解説　野口武彦

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

夢の時間

夢の時間

アイは眠りたかったし、空腹でもあった。夜明けから、ほとんど何も食べていなかったのだ。K街道のガソリン・スタンドで若い男が満タンにオイルを入れている間、彼女は熱い珈琲を飲みながら、ガラス窓越しに空を眺めていた。まだ東の空は明けきらず、ようやく白みはじめた青灰色の薄暗がりがあたりを包みこんで、アイはガラス張りの喫茶室の中で震えていた。夜明けの寒さのためばかりではなく、それはいわば、こうして珈琲を飲みながら、他目には平凡な女ドライヴァーにしか見えない彼女が、実は公金横領の犯人であるとか殺人犯（母親殺しか、それとも彼女を裏切った夫を殺害したとか）で、今まさに逃亡の旅に出かけるべくオイルが満タンに充たされるのを待ちながら、一時、彼女の乱舞する心臓を、熱い香り高い飲物で落ちつかせようとしているからなのだと考えても、一向にかまわないだろう。

アイは喫茶室の窓際の椅子から、街道を走りすぎて行く車の赤や黄やオレンジに光る怪獣の眼玉のようなライトの光線を眺め、少し震える指さきを意識しながら、注意深く両手でカップを支え、珈琲をすすり、口笛を吹きならしたいほど昂揚していた。この指さきの微かな震えは、アイが興奮しすぎているためであり、長く続くはずの旅のことを思えば、彼女の身体は緊張し、吐き

気がして胸が痛いほどだったし、何回も何回も舌で唇をなめまわしながら、冴え渡っているのに一つの思考を結ばない頭部の奥で耳鳴りを聞いていた。

アイが家を出たのは、ちょうど午前三時頃、町の上に広がる空が夜明けの海のように深味をましながら静かにゆれ動き、微かなあさあけの気配を湛えて、ゆっくりとした色彩の変化が、夜の終る空のはてに広がり始め、まだ寝静まっている通りの家々が、うずくまって眠り込んでいる巨人のように見える頃である。彼女は、血管と胃の中に少し沈澱している白っぽいアルコールを、いくらかでも薄めようとして、冷蔵庫から牛乳の三合壜を出し、それをすっかり飲んでしまい、あまり急いで飲んだので急激に冷たい液体をあふれさせた胸と胃がひきつれるように痛み、顔をしかめ両手を胸と胃に当てて、しばらくじっとして波騒ぐ胸と胃を鎮めてから、まだ一度も着たことのない青い光沢のあるコール天の旅行着に着がえ、これもまだ一度も使ったことのない旅行鞄に、必要だと思われるものを押し込んだ。それからアイは部屋の電燈を消し、鍵をかけ、階段を降りて暗い通りを五十メートル程歩いて貸ガレージへ行き、白い車のドアに鍵を差し込み、騒々しい音をたてながら車を発車させた。浮き浮きと、けれども半ばは、不明の暗い予感のようなものを意識しつつ、実際、この夜明け近い時刻の、アイをつき動かしていたある意志の力について言うならば、それはまだ正体不明の予感とも、ある種のはじまりともつかない曖昧な停止した時間の奥から流れて来る音楽のようなものであった。

それで今、彼女は腕時計を眺め、午後八時であることを確かめた。午前三時からずっと運転し

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

つづけ、まるで逃げるように、少しでも休んだりすれば追手の手につかまってしまうとでもいうように、彼女は奇妙な意志にとりつかれて運転しつづけ、途中で食べたものと言えば、K街道のガソリン・スタンドで買ったサンドウィッチと罐詰の桃のジュース三本だったことを思い出した。サンドウィッチとジュースを茶色の紙袋につめてアイに渡しながら、可愛い斜視の娘はニコニコ笑いながら「今日は良いお天気になりますよ。毎度ありがとうございましたあ。お気をつけて、良いドライヴを！」と元気良く勤労意欲に燃えた陽気な声を張りあげ、アイは、自分より三つか四つ若く見える娘に、心から優しく笑いかけたばかりか、いつもドライヴを楽しむ人々を見ながら、ガソリン・スタンドでじっと働いている彼女に同情し、いつかあの娘をドライヴに誘ってやろうと考えたほどであった。今日、初めて見た行きずりの娘が、どんな家庭に育ちどんな世界観を持ち、何を考えて生きているのか、アイはむろん何も知ってはいなかったが、彼女は、あの娘とそうしたことを喋ってみたかったのかもしれないのだ。

あの斜視の娘が言ったように天気は上々で、走る車の内から見る夜明けの景色は、ゆっくりと色を変化させ、空は薄い灰色がかった青色と紫に変り、朝やけのオレンジで端を染めた雲が、道の彼方へ広がっていた。空は、灰色と青と紫とオレンジと桃色を流し、アイは頬にあたる冷たい朝の風を、生れてはじめてあたしは朝の、それも夜明けの風をこうして頬に受けている、と考え、すぐにそれはあまり面白い考えではない、と考え直した。朝は、実にさまざまにあった。いろいろな朝があり、いろいろな夜があり、その中でも特別の、超特別の朝と夜は、一生のうちだって、

そう多くはあるわけがない。アイは、今朝は、まさしく、その特別の朝の一つだろうと信じた。通りすぎる建物や森や車や、大きな看板をアイは眺めた。古い家や新しい家やプレハブの家、黄色い畑や電柱や、森、野原、バス停、すれ違ういろいろな色や型の車、コーラやチョコレートや太田胃散やカラー・テレビや、その他の大きな極彩色の看板が流れさり、アイは先へ先へ進んで来たのである。先へ先へと進むことに魅入られたかのように。

たとえば、彼女はベッドに横たわり、眼を見開いて天井を眺めているのだ。彼女は、あの男のことを、いくとおりにも想像してみることが出来る。今や、こうして、アイは眼を見開き、唇に微笑を浮べさえして、おそらく、他人がアイを見たら、彼女は何も見ていないように見えただろう。アイの眼は何ものかに向って見開かれ、彼女の瞳(ひとみ)の虹彩(こうさい)は茶色の不思議な光をおび、唇はかすかな微笑によって、わずかに左右へ引き伸ばされ、そうして、彼女は、あの男について、あるいはあの男の記憶について、考えることができた。男はあらゆる時間の中で白光に輝きながら燃えあがり、夜は黒い海のように深く、夜の中で、男はアイに向って笑いながら手を差しのべ、あるいはアイの傍に、男は裸の橄欖色(オリーヴいろ)の背中を向けて横たわり、アイの差し伸べる手の動きによって、彼はアイの方へ体の向きをかえ、しかし、彼女を見ているわけではないのだ。ここでは、二

人の人間の関係を支配する意識の暗部は、あまりにも懸け離れ、あまりにも近く、二人はお互いの身体の一部、たとえば、手、指、腕、脚、胸、頸、といった部分に触れながら、しかし、二人はそうした自分とある相似形を保つ向きあったお互いの身体の部分を、もの珍しいものでもあるように触れ、ある不思議さに打たれるのだ。自分の身体の傍に別の肉体があり、それはまさしく息づいている。すると、風が吹いて来るのだ。すべての始源の海と河から、あるいは森から吹いて来る風が、部屋の中をわたり、ここから離れた遠い場所で、何が起り誰が死んでいったか、涙と血はどれほど流され、どれほどの炎が燃えたのか、あるいは窓の外の街路で、世界はどう動いているのか。静まりかえり、濃密な夜の空気がすべての暖かい大地と海の上を覆い、二人のいるこの部屋からは見えない場所で、何事かが進行しているはずだった。そうして、この部屋で時間は静かに濃密にたなびき、しばらくすれば、彼等は、お互いの身体を完全に密着させ、お互いの肉体の快楽の迷路をさまよいながら、あらゆる感覚を、相手の皮膚と密着した極微の空間へ電流のように放射し、その中で、彼等は、相手の肉体の、慄えと、微かな、時には激しい衝撃のような痙攣、汗、匂い、声等を見つめ、感じ取り、応えながら、密着した肉体の深い内部を覗くことによって存在している。海の水平線の彼方では、雲の塊が風に吹き砕かれ、飛び去り、氷片のように星が輝き、彼等は仄白く浮びあがるシーツにくるまれて、お互いにもっとも近い距離の中で、もっとも遠い距離のひろがる空間を二重に交錯させながら、密着しあったまま動きつづける。

たいていの場合、アイは見出すのだ。濃密な夜の闇が押包む家の中のある一つの部屋の寝台の

上で、あるいは薄明の、夜明け近い時刻、あるいは太陽の照りつける昼間、横たわっている自分の肉体と、すぐ傍にあるもう一つの肉体を。それは不思議なことであり、奇妙なことである。彼等はそうして、横たわりながら話をした。時々は話ははずみ、アイたちは笑い声をあげ、陽気に相手の首へ腕をまわして抱きついたりもした。しかし、言葉への過剰な願望と言葉の意味の密度に対するお互いへ向けられた要請が、反対に彼等を口ごもらせることを強いるのだ。言葉は濃密な闇を、ある重層的な空間として照らし出してみせる光線であり、最も深い原初の身振りが、彼等の一切の行為を支配するのだ。アイが不在の彼を想像する時、あるいは、眼の前の彼についてアイが考える時。彼等はお互いの間に取りかわされる伝達に対して、ある種の正確さを意図し、それはいつも押し止められてしまうのだ。彼等は空虚な深い暗闇の中へおいやられる。語られない言葉。自分自身の内部でさえ、無知にとどまっている身振りとイマージュ。アイの内部には空虚な海か空のようなものがあって、その内側で彼女は宙吊りになっているのだ。その時、すべての前で彼女は0だ。ひしめいている言葉。この闇の中で、この海の中で、この空の中で、乳色の吐瀉物のような銀河を流れる曖昧な白い帯がかけ渡され、深夜、稲光が紫色の閃光で夜空を切り裂き、雷鳴が響き渡る。まるでそれは空と大地が一個の巨大な筒状の楽器になったかのように、雷鳴を轟かせるのだ。

車の中で彼女が急に眠気におそわれはじめた頃、空模様がかわって来て、窓から入って来る風が湿気を含み、前方の小高い山の上と右側の森の上に、灰色の厚い雲の塊が動きはじめ、雨の予

感があたりを重く支配し、道はさらに彼方まで、暗闇の中へ、自動車のライトの照らし出せない、ずっと奥まで黒々と続いている。アイは急に疲れを覚え、体中の張りつめていた筋肉に溜まった疲れが、いちどきに眼底に集中し、たまらず眠りたかった。さっきまでの上機嫌は後かたもなく——。やがて、不吉な暗闇の中から大粒の雨が音をたてて降りはじめる。降りはじめたばかりの雨粒がフロント・ガラスを打ち、ガラスにあたった雨粒は、小さな水滴の水玉模様をガラス一面に作り水の流れとなってガラスを伝い、左右の窓から入り込む冷たい雨の針が、アイの顔や手や髪を濡らした。

夥しい雨のしぶきが、濡れた黒いアスファルトの上に舞いあがり、アスファルトの上を水が流れる。車の屋根に音立てて打ちかかる雨は流れとなって地面に落ち、あたりは一面の河のようだった。地面を水が流れ、黒々とした畑の稲の上に落ちる雨に、稲は首をたれ、生きもののように騒めいた。

彼女は車を止め、左右の窓を締めて煙草をくわえる。ガラスに打ちつけられる雨が、流れ落ち、今や小さな空間の中に彼女は完全に閉じ込められていた。ガラスに打ちつけられる雨のために外は全然見えなかったし、雨は道路と左右の畑と森の上に激しく降り、彼女の乗っている車の表面の上にも降りつづけ、彼女を小さな空間に閉じこめている雨の音の他には何も聞えず、彼女はワイパアを作動させ、ハンドルに腕と頭をもたせかけながら、深い眠りの闇の中に落ち込んでしまう。突然、深い竪穴に落ち込んで行くように、時間が絶ち切られたように、黒い眠りの沼に、声

もたてず沈みこみながら、ほんの束の間、眠りの暗い沼の深い奥底で彼女を待っている、沼蛇やがま蛙の姿をした夢魔のことを思い浮べながら——。

——あたりは大きな石がいっぱい転がっていて、道路には小さな石くれがつづれになって一面に広がっていた。早く走らなければいけないと焦ってもスピードが出せないのだ。夢のつづれ織りの迷路。いつの間にか、おなじみの、幽霊町にアイの車は入り込み、まるで車と軒がぶつかりそうな狭い道を苦心惨澹脱け出そうとしている。アイは、その時いつも息苦しくなってしまう。それから、誰もいない廃墟の大きな建物を彼女は発見し、彼女たちは建物の崩れかかった石造りの壁の蔭に車を隠して、荒れ果てた建物の中へ入って行く。建物は冷たい粗い石で出来ていて、回教寺院のような円天井の三分の二近くは崩れ落ちているのだが、奇妙なことに、建物の円天井には、支えの鉄骨が一本もなく、底の部分を中心に割れた珈琲茶碗を、下から見あげているみたいだった。床には石塊がいっぱい落ちていて、円天井の崩れ落ちた大きな穴を見上げると、プラネタリウムそっくりの、まるで大袈裟な、星だらけの空があって、そこはとても寒かった。とても寒くて、彼女たちは毛布を体に巻きつけたが、それでもまだ寒く、風が音を立てて吹いていた。床の石くれや砂は舞いあがるし、草は風になびいてヒューヒュー無気味な音をたて、体に巻きつ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com